

目的 これまで静岡県東部地域に居住する婦人の甘味嗜好検査では、甘味に対する嗜好濃度が高く、かつ間食の摂取も多いことがわかった。県内でも最西部に居住する人達が東部地域の人達と同じような嗜好を示すかどうか、また味付に対する意識を知り、間食の摂取状態とあわせて検討を行ってみた。

方法 対象は静岡県磐田郡豊田町に居住する20才代から60才代の婦人101名。味覚検査の試料は日常生活に即したものと、牛乳かんと高野豆腐を取り上げた。牛乳かんは甘味の閾値(3, 4, 5%)と嗜好濃度(8, 12, 17, 23%)と、高野豆腐は煮物の甘味嗜好濃度(8, 12, 16, 20%)と調べた。間食に関するアンケート調査では、間食の種類、摂取頻度、摂取量などをたずね、更に甘味に対する意識を調べた。

結果 [I]味覚検査 牛乳かんの甘味閾値は $4.3 \pm 0.6\%$ 、牛乳かんの甘味嗜好濃度は $16.7 \pm 5.3\%$ 、高野豆腐の煮物としての甘味嗜好濃度は $14.6 \pm 4.3\%$ であった。蔗糖の閾値0.7%、都市20才女子の蔗糖溶液の嗜好濃度9.2%、牛乳かんや高野豆腐の一般的な甘味濃度などからみて、本対象者の方が高濃度を嗜好した。甘味嗜好濃度について両地域を比較すると、牛乳かんで $p < 0.01$ 、高野豆腐煮物で $p < 0.05$ で共に西部地域の方が有意に高かった。[II]間食調査 間食からのエネルギー摂取量は $331 \pm 211$  Kcalで東部地域とほぼ同程度であった。間食からと調味料からの砂糖摂取量は、それぞれ24g、16gで東部地域 国民栄養調査成績よりも多かった。西部地域の婦人は甘味嗜好濃度が高いにもかかわらず、自分の味付を普通または弱いと考える、控えていると意識している人が大半であった。